

第18回 小学校英語教育学会 (JES) 長崎大会 自由研究発表プログラム

自由研究発表(1) 7月28日(土) ①11:00~11:30 ②11:40~12:10

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 |
|------|------|---|----------------|--------------------------|------|--|--------|
| 教養A棟 | A22 | ① シャドーイング練習が小学生のリスニング力向上にもたらす効果 | 戸井 一宏 | 広島大学大学院生、広島市立戸坂城山小学校 | 研究発表 | 研究は、シャドーイングが小学生のリスニング力向上にもたらす効果を明らかにし、シャドーイングを用いた指導の可能性について探ることを目的とし、小学6年生を対象に1か月間に15分のシャドーイング練習を10回行い、その効果を分析したものである。テストのスコアと児童アンケートを基に、シャドーイング練習がもたらした効果について分析したことを発表する。 | 佐久 正秀 |
| | | ② 音響音声学に基づく「Left」と「Right」の分析—児童の混乱要因と指導の手立て— | 岡本 真砂夫 | 姫路市立八幡小学校 | 研究発表 | 児童に「Left」「Right」を弁別できるようにした上でALTの「Left」「Right」を聞き分けさせたところ、左右が認識できない児童が多かった。そこで授業の観察を行った上でPraatを用いて英語母語話者の「Left」「Right」のフォルマント値を算出した。結果、流音、母音共にF1,F2が似ていることが混乱の原因と確認された。流音はF3に大きな違いがあり、ALTと授業を行う意義が確認された。 | |
| 教養A棟 | A23 | ① 日米の小学校における外国語活動と道徳の教科横断的授業の一例 | 西尾 由香 | アメリカ・ワシントン州 四つ葉学院 | 実践報告 | 外国語活動と道徳を教科横断的な視点で捉え、主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、アメリカ・ワシントン州の公立小学校と日本国内の小学校において同様の国際理解教育に関する授業を実践し、両国の児童の異文化への興味や理解度、どのような変容が見られたかを検証した。授業の内容や、日米の児童の様子や関心項目についての相違点など、映像や画像を交えて自由研究発表の場で、具体的に明らかにしていきたい。 | 新海 かおる |
| | | ② 図画工作の視点を取り入れた小学校英語教育の考察—イタリアのCLIL授業観察と日本での授業実践より— | 二五 義博 | 海上保安大学校 | 実践報告 | 本発表は、小学校高学年を対象としたイタリアおよび日本の授業事例を比較考察しながら、図画工作の視点を生かした小学校英語教育をCLILの4C「内容」「言語」「思考」「協学」と多重知能の視点から分析する。また、実技教科と英語の教科横断的授業が、新学習指導要領の掲げる児童の「主体的・対話的で深い学び」につながる可能性を探る。 | |
| 教養A棟 | A24 | ① Student Teachers' Knowledge, Ability & Opinions Regarding Picture Books | 多田 ウエンディ | 兵庫教育大学 | 研究発表 | 本研究では国立教育大学の1年生86名を対象に、英語絵本に関する知識、能力、および意見に関する調査を行った。その分析結果を発表する。この調査結果によると小学校の授業で英語絵本と対話型読み聞かせの活動を取り入れる際に、いくつかの課題がある。特に教育実習生の語学能力や英語絵本知識の不足、大勢の前で英語で話すことへの不安が挙げられる。 | 佐藤 玲子 |
| | | ② 英語絵本を教材とした小学校英語教育教員養成プログラムの開発 | 脇本 聡美 | 神戸常盤大学 | 研究発表 | 養成課程学生が持つ英語学習の概念を小学校英語教育に適したものに再構築することを目指す英語絵本を教材としたプログラムの有効性の検証が本研究の目的である。プログラムの一環で、4年生学生が公立小学校において英語絵本を教材とした研究授業を行った。学生の概念がどのように変容したかに着目し、授業実践と実践後の学生へのインタビューを質的に分析した。その結果、一定の成果と今後への示唆が得られた。 | |
| 教養A棟 | A31 | ① 英語音声指導に表れる教師の信念に関する事例研究: 授業者の省察的語りを手がかりに | 和田あずさ | 兵庫教育大学 | 研究発表 | 教師の信念の内実をとおして授業行為を解釈する試みは、言語教師認知研究の発展のみならず、実践知を共有し、教師の自己変容を促す一助となる。本研究は、熟達した段階にある教員を事例とし、ライフストーリーと英語音声指導に関する信念についてのインタビュー、継続的な授業の参与観察、毎授業後の省察により、英語音声指導に関する信念と実践の変容過程を詳らかにする。 | 大谷 五十二 |
| | | ② 文字の「音」に気づく—ローマ字指導からの接続を意識した「音韻認識」指導プログラム— | 池田 周 | 愛知県立大学 | 研究発表 | 英語音韻認識を高めることは読み書き技能導入のレディネスであるが、小学校のどの段階に指導を組み込むべきかの検討が必要である。本研究は、小学校「外国語科」における文字の音の意識化に先立ち、小学校3年国語科のローマ字学習を「文字の音に気づかせるアプローチ」によって行うことが、児童の英語音韻認識に影響を及ぼすのかどうかを予備調査結果から考察する。また、ローマ字学習と英語学習の接続可能性についても論じる。 | |
| 教養A棟 | A32 | ① 小学校教員を対象とした発音指導の効果—フォニックスから発音記号へ— | 山本 玲子 | 京都外国語大学 | 実践報告 | 本研究の目的は、英語が専門ではない教員や、発音指導法を学んだことがない教員にとってハードルが低くかつ有効な発音指導法を開発することである。フォニックス、特にアルファベットの音読みを日頃指導している小学校教員にとってIPA(発音記号)はその延長上において理解が容易であるとの考察に基づき、教材開発及び実践を行った。その結果発音テストのintelligibilityが有意に向上するとの結果が得られた。 | 石塚 博規 |
| | | ② 文字が示す音の読み方指導の実践—担任、ALT、中学校教員の特徴を生かして— | 長田 恵理 赤井 晴子 | 國學院大学 鶴ヶ島市立西中学校、新町小学校 | 実践報告 | 本発表は、中学英語科教員が中心となり、担任やALTを巻き込んで、6年児童に対してセンテックフォニックスの手法を用いて、5月から毎回15分を使って文字の音読み指導を行い、児童の「文字の音を学ぶこと」に対する意識、中1に進級して英語の授業が始まることから小学校での音読み指導の効力感、及び指導者の意識を調査した結果を報告するものである。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|------|------|--------|---|--------------------------|------------------------------------|------|---|---------------|
| 教養A棟 | A33 | ① | 全面実施へのスムーズな移行期の取組みに向けて | 鈴木 由季子 | 愛知県尾張旭市立本地原小学校 | 実践報告 | 尾張旭市では、英語力に自信がなかったり、外国語の授業のイメージがもてなかったり、まだまだ不安を抱えている教員が多い状況である。その不安を少しでも払拭するために、全面実施に向けて行っている取り組み、①教員研修、②授業実践、③英語教育推進委員会について紹介する。また、その後の教員の外国語活動の授業に対する向き合い方の変化について報告する。 | 畑江 美佳 |
| | | ② | 2020 - Elementary School English Education Reforms English as a Subject - Are We Ready? | Douglas Parkin | 山口学芸大学 | 実践報告 | 本研究の目的は発表者が現在、所属先大学で担当している「英語科教育法(小)」が、平成30年度より全面実施される新しい小学校学習指導要領に合致した内容を備えているかを検証することである。発表者は平成22年度より同授業を担当している。分析の結果、発表者が担当する同授業は新しい学習指導要領が求める項目の大半を満たしているが、文字指導とICTの活用という点では改善が求められることが明らかになった | |
| 教養A棟 | A41 | ① | | | | | | 鷹巣 雅英 |
| | | ② | 自己決定理論を用いた文字指導—小学校高学年児童の「書くこと」のモチベーションの向上— | 杉浦 正成 | 愛知教育大学教職大学院 | 実践報告 | 本研究は、小学校高学年児童への文字指導についての研究である。児童の「書くこと」への興味を基に、「思考を伴う、英語を書く活動」を取り入れることが、内発的動機づけを高めることに有効であると考えた。そこで、自己決定理論の学習動機に影響を与える心理的欲求に働きかける1単位時間の授業実践と、「書くこと」へのモチベーションの関係についての調査分析を行う。発表では、その調査分析結果を報告する。 | |
| 教養A棟 | A42 | ① | 並べ替え学習ソフトによる帰納的文法学習—小学校英語学習者を対象に— | 青木 信之 渡辺 智恵 池上 真人 | 広島市立大学 広島市立大学 松山大学 | 実践報告 | 本研究は、コンピュータを使った並べ替え学習ソフトMaG(Magnet Grammar)を用い、動詞likeを使った肯定、否定、疑問の語順と人称に合わせた動詞等の変化を題材として、小学校英語学習者が英語の語順や文法を帰納的に学ぶことを検証し、また彼らの英文再構築の試行錯誤データから、読みや理解の過程について詳細に知ることを目的とする。 | 堀田 誠 卯城 祐司 |
| | | ② | 帰納的教材提示による気づきの効果 | 瀧本 哲弘 | 明石市立中崎小学校 | 研究発表 | 本研究では、帰納的教材提示の効果について、演繹的教材提示との比較によって検証することとした。参加者は帰納的教材提示と演繹的教材提示のグループに分けられ、途中で入れ替えられた。検証方法としては、t検定による自作テスト結果の分析と、参加者の自由記述テキストマイニングする方法を併用した。本発表では、提示方法や検証結果の具体を中心に示しながら、児童に気づきを促す効果的な指導法について考えていきたい。 | |
| 教養A棟 | A43 | ① | 英語指導力の向上を目指した校内研修キットの開発 | 町田 智久 牛木 豊 | 国際教養大学 大仙市教育委員会 | 実践報告 | 本研究では、小学校教員の英語指導力の向上を目指し、各学校の校内研修で実施可能な研修キットを開発し、その効果を検証した。秋田県内の公立小学校の校内研修で活用し、15名の教員を対象に外国語不安や情意面での変化を調査した。研修後、参加者の外国語不安指数の平均値及び、英語に不安を感じる教員の割合はともに減少した。また、情意面でもポジティブな変化がみられた。発表では研修キットの内容について説明したい。 | 中村 香恵子 |
| | | ② | 「わが町紹介」で心を結ぶ英お教育～長崎県五島市と北海道厚真町との交流活動 | 根岸 清人 小嶋 裕紀子 秋山 敏晴 | 厚真町教育委員会 長崎県五島市教育委員会 北海道科学大学 | 実践報告 | 長崎県五島市のA小学校と北海道厚真町のB、C小学校は、毎年12月にインターネットのビデオ通話を利用し、自分の住む地域や市町を紹介し合う交流活動を実施している。活動のわらには、学級の仲間以外の相手へわが町を紹介するという新鮮なコミュニケーション活動を通して、新学習指導要領が求める「情報を整理し、自らの考えを形成し、英語で表現したり、伝え合ったり」することにある。この交流活動の成果と課題を発表する。 | |

| | 教室 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 |
|------|-----|--|-----------------------|----------------------------|------|--|
| 教養A棟 | A14 | ローマ字学習の現状と課題—小学校英語教科化を見据えて— | 高松 理英子 | 相生市立青葉台小学校 | 研究発表 | 国語・英語という枠を超えたローマ字学習の現状と課題を明らかにしたい。4年生児童に質問紙調査・ローマ字書記能力調査及び教師を参加者とした面接調査を行った。塾等で学習経験のある児童と無い児童の間に動機づけや書記能力に有意差が生じた。また、小学校教師が定着を図ってワークブックを使用することが一部の児童のローマ字嫌いを助長する一方、教師の音声と文字をつなぐ指導が児童の意欲を喚起する可能性が示唆された。 |
| | | 新学習指導要領に見られる小・中学校の英語教育の特徴——計量テキスト分析による可視化—— | 鈴木 涉 齋藤 玲 川井 一枝 | 宮城教育大学 東北大学大学院生 宮城大学 | 研究発表 | 2017年3月に次期学習指導要領が公示された。これまでは、小学校の高学年で「外国語活動」が行われてきたが、今回の改定では、これが「外国語科」になり、中学年に「外国語活動」が導入される。中学校の学習指導要領も約10年ぶりに改定された。本研究の目的は、計量テキスト分析を用いて、小・中学校の新学習指導要領の内容を分析し、英語教育の特徴を可視化することである。 |
| | | 自閉症スペクトラム児童に対する外国語教育の実践：外国語の伸びが母語の伸びに影響を与えた事例 | 川合 紀宗 | 広島大学 | 実践報告 | 英語の学習に強い興味を示している、小学校特別支援学級在籍児童に対し、場所を表す前置詞を学習する実践を行うことにより、対象児の英語による位置関係の理解を促し、そのことが母語における位置関係の理解の向上にもどの程度影響を及ぼすかについて分析した。事前のスクリーニングテストでは正答率は英語で25%、日本語で35%であったが、指導後は正答率が英語で95%、日本語で100%と顕著に伸びた。 |
| | | 大学生の授業見学を受け入れた小学校教員の気づき 外国語科・外国語活動の研修の摸索 | 階戸 陽太 | 北陸大学 | 研究発表 | 本研究は、教職課程を受講する大学生の外国語活動の授業見学を受け入れた小学校教員の気づきを通して、小学校での外国語科・外国語活動の研修に関して提案を行うことを目的としている。授業見学の後、学生は「振り返り」をワードで作成する。その「振り返り」を、授業を行った小学校教員に送り、学生に対してコメントをもらっている。このコメントを元に、インタビューを実施し、分析を行う。 |
| | | スモールトークでの相互評価をICTで支援する授業の実践 | 倉田 伸 江崎 弘海 | 長崎大学 長崎大学教育学部附属小学校 | 実践報告 | 小学校の英語教育では、相手に配慮したコミュニケーションが重要視されているため、聞き手からの感想を反映させた形式的評価が必要であるが、コミュニケーション活動は記録が困難であり評価が難しい。そこで、マーカーを用いた動画アノテーションの評価内容をプリセットし、文字入力がなくともポイントの場面を評価できるよう改良したアプリケーションを活用した授業実践を行った。本発表はその報告である。 |
| | | 学習者主体の学習計画の構築と実践 — Let's Try! 1 Unit 7をもとにした小学校3年生での試み — | 高田 実里 | 熊本大学教育学部附属小学校 | 実践報告 | 本実践は、小学校3年生の児童と教師がLet's Try! 1の題材をもとに、共に話し合いながら単元の学習計画を構築し、プロジェクト型の学習を遂行した試みである。児童が主体的に学習の計画にかかわり、自ら学びをコントロールすることで、相手意識を高め、場面や状況に応じた言語表現・身体表現について、対話を通して気付きを得ることや工夫を促すことができるか検証した。 |
| | | CLIL的アプローチによる外国語と図画工作科の融合 —異文化理解につながる教材開発の試み— | 藤井 康子 東 奈美子 | 大分大学 熊本市立健軍小学校 | 実践報告 | CLILの理論と指導法とに着目し、図画工作科における視覚的言語 (visual language) や造形要素 (色・形・素材など) といった教科特性を生かして小学校外国語活動・外国語との融合教材を開発する試みである。本発表では特に、スペインでの現地調査及び実験授業、小学校における教育実践の結果を基に、外国語と図画工作科の融合の在り方について考察する。 |
| | | 英語の読み書き困難に関する事例—URAWSS—Englishを用いたアセスメントと支援— | 林田 宏一 | 一般社団法人あかつき心理・教育相談室 | 実践報告 | 本発表は、英語学習困難を抱える小中学生の事例の発表である。英語学習に困難を抱える小中学生に対して、英単語の読み書き困難を評価するURAWSS—Englishを使ったアセスメントと支援について、実践を行い、英語学習困難を抱える子どもに対して、英単語を「読むこと」「書くこと」の学習に対して、適切な学習方略の検討を行ったものである。 |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|------|------|--------|---|----------------------------------|---|------|---|-------|
| 教養A棟 | A22 | ③ | 母語にない音素の認識は言語獲得を促進するか—「音声に親しむ」だけの場合との文法適格性判断成績比較— | 長井 克己 | 香川大学 | 研究発表 | 小学校外国語科で学ぶ文字と音声の対応では音素単位の認識が重要視され、単語の一部が似ているか、韻を踏むか等の判断を求める活動が行われる。このような分析的アプローチは、言語獲得の初期段階に必要なのか。音声の違いに親しむことを続けるだけでは駄目なのか。人工言語の文法適格性を学習する実験を行ったところ、新規な音素の聞き分けを事前に行った群は、単純に該当言語を聞き続ける群よりも成績が低くなった。 | 秋山 敏晴 |
| | | ④ | 同一の英語非単語に対する児童の音韻認識と音声産出の特徴—Children's Test of Nonword Repetitionの音韻構造を巡って— | 佐久間 康之 高木 修一 | 福島大学 福島大学 | 研究発表 | 非単語反復に関する日本人児童の音韻認識の特徴として、音節数の多い単語そして音韻構造の子音連結を含んだ単語の認識は難しいことが報告されている(e.g. 湯澤他, 2012)。しかし、非単語反復課題の課題として、音韻の認識ができても産出ができない非単語と、そもそも認識さえできない非単語を区別できないことが挙げられる(高木・佐久間, 2017)。そこで本研究では非単語の認識と産出に違いを検証した。 | |
| | | ⑤ | 小学校外国語活動のための音声指導書の作成—『Let's Try! 2』について— | 上斗 晶代 西尾 由里 三宅 美鈴 戸井 一宏 | 県立広島大学 名城大学 広島国際大学 広島市立戸坂城山小学校 | 研究発表 | 小学校外国語活動の新教材『Let's Try! 2』に準拠した音声指導書作成へ向けて、その概要と作成例を提示する。教材に出現する語彙と表現について分節素と超分節素を分析し、アンケート調査結果や先行研究に基づき、単元毎にポイントとなる音声の解説と指導のヒントを日英語対照の観点から記述する。指導上困難で、児童にとっても発音困難な母音間、子音間の区別、子音連続、イントネーションは重点的に解説をする。 | 泉 恵美子 |
| | | ⑥ | 音と文字遊びプログラム・アルファベットタイムの試み | 寺田 よしみ | 長崎大学(非常勤)、長崎市JTE | 研究発表 | 本研究では、初期の文字学習プログラム(アルファベットタイム)を作成し、公立小学校36名を対象に5年生から6年生の経過を経て実践、調査を行った。アルファベットタイムは、限定した単語を中心としたインタラクティブな活動を通して、段階的に文字活動における認識が進み、児童が帰納的に音と文字の関係などの言語特性に気付くように構成されている。アンケートと簡易チェックテスト結果を含め、考察を行った。 | |
| | | ⑦ | 英語が「読める」とはどういうことか—「無意味語(nonsense word)」の聴音・読字調査から— | 畑江 美佳 | 鳴門教育大学 | 研究発表 | 子どもが英語を「読める」というのはどういうことなのか。英語を「読む」能力は他の3技能にも影響を与えたとされる。本研究は、英語の「聞く」「読む」を関連付け、そのメカニズムに沿って指導法を検討する。調査では、5年生から2年間、段階的・系統的な文字指導を継続したところ、正確な英語の聴音・読字が可能になった。今後小学校から始まる文字指導において、より深く「読む」技能の習得について議論すべきであろう。 | |
| 教養A棟 | A23 | ③ | 小学校担任と創るWe Can!を使用したCLIL型授業の工夫と提案 | 櫻木 洋子 松延 亜紀 安田 万里 | 大阪教育大学 甲南女子大学(非常勤) 神戸市イングリッシュサポートリーダー | 実践報告 | 本発表では、新教材「We Can!2」Unit2: Welcome to Japanを使用して、学級担任とのチームティーチングで実践した他教科横断型・CLIL型授業を報告・考察する。学習指導要領で示される「3つの資質・能力」の育成は、児童を深く理解している担任の主体的な関わりが必須であることを検証する。 | 鷹巣 雅英 |
| | | ④ | 3年生を対象としたCLIL授業～大豆をテーマとして～ | 坂本 ひとみ | 東洋学園大学 | 実践報告 | 3年生を対象とし、児童が他教科で学んでいた大豆をテーマとしたCLIL授業案を担当教員、ゼミ生と協働で作成し、実践した。既習事項を英語で復習することから始めたので、児童は内容をよく理解し、豆を扱った英語絵本にも興味を示し、世界の豆料理にも関心を持って、授業に活発に参加した。新学習指導要領では中学年に外国語活動が導入されるが、この年齢の児童にもCLILは有効である可能性を見出すことができた。 | |
| | | ⑤ | 小学校英語教育におけるプログラミング教育を導入したCLIL型学習の可能性—時制への気づきを促すために— | 風早 由佳 Luc Gougeon | 岡山県立大学 環太平洋大学 | 研究発表 | 本研究は、プログラミング教育と英語学習を統合したCLIL型授業実践についての研究である。複雑な情報を読み解き、解決すべき課題や解決の手立てを見出し、他者と協働する「プログラミング的思考力」は、CLILの基本理念とも多くの点で共通する。プログラミング教材を用いて動機づけを向上させながら、動詞の変化(時制)に対する気づきを促すことを目指す。 | 東 悦子 |
| | | ⑥ | 内容言語統合型指導法(CLIL)に於ける児童の発話のタイプ分析 | 居村 啓子 | 拓殖大学 | 研究発表 | 本研究は、内容言語統合型指導法(CLIL)の授業に於ける児童の発話を量的、質的観点より分析した。CLIL以外の授業との発話量の違いがあるか、また指導のフォーカスと児童の発話のタイプとの関連があるかを見ることで、内容重視の授業が児童の発話に与える影響を検証した。結果内容重視の授業に於いては、児童の発話量が増え、繰り返しや1語に加えて、2語以上の発話や、より自由度のある発話が促されることが判明した。 | |
| | | ⑦ | Tokyo2020に向けて、国際協働学習を—CLILによるオリンピック・パラリンピック授業実践— | 滝沢 麻由美 | 東洋学園大学(非常勤) | 実践報告 | 本研究は、昨年度に東京都と他地域の8つの研究協力校で、オリ・パラ教育の一環としておこなわれた実践授業の中で、特に都教委の「世界とつながるプロジェクト」として、国際的組織であるIEARNの国際協働学習をオーストラリアの小学校とおこなった1校に焦点を当て、そのためのCLIL授業と、新学習指導要領の3つの柱にCLILの4Csを組み合わせた目標観点から、児童にどのような学びが見られたかについて報告する。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|------|------|--------|---|--------------------------|---|------|--|-------|
| 教養A棟 | A24 | ③ | 小学校英語における専科指導の現状と課題 | 萬谷 隆一 | 北海道教育大学札幌校 | 研究発表 | 昨今、多くの自治体で小学校英語の専科教員を配置する流れが広がっており、専科教員の強みを生かして、いかに全体の教育の質を上げてゆかが、今後の大きな課題である。本研究は、専科教員の長所と課題について検証し、教科化に向けた移行期間となるこの時期に、専科教員がどのような役割を果たしてゆくべきか、望ましい指導体制のあり方について、手がかりを探ることを目的とする。 | 佐藤 玲子 |
| | | ④ | 学級担任と英語専科どちらが指導すべきか | 渡部 靖徳 | (前)山口市立井関小学校 | 実践報告 | 移行措置がスタートし、全国で試行錯誤が続いている。我が国では学級担任が指導することが大半である。これに対し、近隣の台北や韓国では大都市を中心に小学校教員の専科教員が担当している。韓国の地方では学級担任が指導する例も多い。両者を対比して、学級担任と専科どちらが指導するのが良いのか、両者の長所と短所を分析検討し我が国の今後について展望してみたい。 | |
| | | ⑤ | 「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業コアカリキュラム小学校英語実践事例DVD」の使い方—こんなふうに活用してみてもいい？授業者からさらに提案します— | 新海 かおる | 春日部市立武里小学校 | 実践報告 | 文部科学省委託「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」小学校英語実践事例DVDをご覧になったことはありませんか。授業者本人が、授業映像をお見せしながら、「さらにこんなふうに活用したらいかがでしょうか?」ももっとこんな指導の工夫をしたら、児童の反応がよくなりました。」などの実践を発表します。 | |
| | | ⑥ | 省察ツールJ-POSTL【小学校英語指導者編】の課題と展望 | 竹田 里香 土屋 佳雅里 若松 里佳 | 姫路獨協大学他(非常勤) 杉並区小学校英語講師 荒川区英語アドバイザー | 研究発表 | 指導者の成長のための省察ツールである「言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)」【小学校英語指導者編】(J-POSTLエレメンタリー)の自己評価記述文の草案が作成された。今後、その活用を広げるため、実際に小学校外国語科で指導に係る様々な立場の指導者に草案の一部を使用して頂き、アンケート結果から見える、省察の現状の把握と、J-POSTLエレメンタリーの課題と今後の展望を検討する。 | 秋山 敏晴 |
| | | ⑦ | 小学生用デジタル教材で成人のリスニング力は向上するか?—教員養成を視野に入れた予備的研究— | 長谷川 修治 安藤 則夫 | 植草学園大学 植草学園大学 | 研究発表 | 本研究では、英語の苦手な学生が多い教員養成課程で、小学校5・6年生用に開発したデジタル教材を使用して成人が個別学習をした場合、英語力の基本となるリスニング力は向上するかを検証した。大学3・4年生合計9名の参加者が、1日1つ15分程度のLessonを目安に18 Lessonsの個別学習を行い、リスニング力がほぼ等しい大学1年生9名が通常の英語授業13回の学習を行った場合と比較した。 | |
| 教養A棟 | A31 | ③ | ティーチャー・トーク方略の向上を目指した ワークショップ型校内教員研修の試み | 三ツ木 由佳 | 立命館小学校 | 実践報告 | 本実践研究は、英語の授業で重要な役割を担うティーチャー・トーク(以下、TT)をテーマとした教員研修の報告である。研修参加教員が自身の授業のリフレクションを行い、あらかじめ録画しておいた授業ビデオを見ながら、改善案を教員間で共に考え直した。授業観察からは、6つのTT方略に関わる問題点が明らかになった。それらに基づいた研修内容や研修参加者の気づき、事前事後の授業の変化などについて報告する。 | 猫田 和明 |
| | | ④ | 外国語活動における教員と児童の順番交替の組織 —会話分析の観点から— | 大塚 清高 | 明治大学大学院生 | 研究発表 | 本研究は、外国語活動の授業で、教員たちと児童たちの会話の順番交替がどのように行われ、学習がなされているのかを、会話分析の観点から探る研究である。授業の録音・録画データを分析した結果、授業内の会話の順番交替が教員と児童によって相互行為的に達成されていること、各活動の教授法や教育目標と順番交替の組織の間に相互参照的な関係性があることがわかった。発表では、会話データや詳細な分析結果を示す予定である。 | |
| | | ⑤ | 小学校英語授業におけるTeacher Talkの工夫 —明示的指導の効果に関する大学院生を対象としたパイロット調査— | 松宮 奈賀子 備井 理恵 | 広島大学 昭和女子大学附属昭和小学校 | 研究発表 | 指導者による「児童に伝わる英語の話し方(Teacher Talkテクニック)」に関する明示的指導の効果を検証した。大学院生6名に明示的指導の前後に小学校の英語授業映像(事前2本、事後2本、1本は事前と事後で重複)を視聴させ、指導者の工夫に対する気付きの数や質に変化が見られるかを検討した結果、いずれにおいても向上が見られ、自力で気付きにくかった言い換え等にも目が向くようになったことが示された。 | |
| | | ⑥ | ALTとのチームティーチング授業における教師間の相互作用 会話分析からの教育的示唆 | PEARCE DANIEL ROY | 京都大学 | 研究発表 | 小学校におけるALTとの共同授業時間数の割合が年々増加傾向にある。しかし、ALTの効果的な活用法や授業中の役割分担に悩む学級担任は少なくない。本研究では共同授業内の相互作用を五つの観点(①教員による指示、②意味と流暢さ中心の活動、③言語形式中心の活動、④タスク活動、⑤異文化の活動)から検証した。公立小学校2校8教室分の分析を通してALTとの授業の進め方について考察する。 | 巽 徹 |
| | | ⑦ | 小学校のチーム・ティーチングにおけるALTの役割 —会話分析による参加パターンの類型化— | 國谷 徹 | 広島大学 | 研究発表 | 本研究の目的は、学級担任と外国語指導助手(ALT)のチーム・ティーチングについて、会話分析の手法を用いてALTの参加パターンと役割を明らかにすることである。Aline & Hosoda(2006)と同様の分析手法を用い、T.T.におけるALTの参加パターンを類型化して示す。教育経験に差のあるALTを調査対象とし、ALTの教育経験の差が参加パターンの差異に現れるかを分析する。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|------|------|--------|---|------------------------------------|--|------|--|--------|
| 教養A棟 | A32 | ③ | 小学校英語指導者のためのパフォーマンス評価の開発ーCLIL的アプローチ指導におけるルーブリック評価の試みー | 内山 工 | 神田外語大学(非常勤) | 研究発表 | 「児童英語指導法」を履修している学習者を対象に、CLILの概念(4Cs)を基に、学習(指導)目標と評価の一体化を試みた。学習者が意欲的に活動に取り組みよう、学習者自身が学習目標を理解し、取り組みの仕方を知り、身に付けるべき力を周知できるよう評価基準(ルーブリック)の観点で学習者と共に作成した。2020年教科化に向け学習者が作成手順を実践的に体験しその有効性を明らかにした。 | 佐久 正秀 |
| | | ④ | 小学校英語における書く能力と評価に関する考察 | 丹藤 永也 | 青森公立大学 | 研究発表 | 本研究では、次期学習指導要領とその解説及び文部科学省が発行した移行教材を分析することによって、小学校英語が目指す「書くこと」の能力における構成概念の理論的定義と操作的定義について検討する。その後、最終到達目標並びに下位到達目標の設定を試み、その上でテスト細目規定を作成し、それに基づいたテストのひな形を開発する。 | |
| | | ⑤ | 学習者の自発的なL2アウトプットを促すteacher talkの特徴ーCOLTIによる発話分析ー | 片桐 徳昭 大橋 由紀子 | 北海道教育大学 ヤマザキ動物看護大学 | 研究発表 | 小学校5年生の英語授業6クラス(2クラスは外国語活動、4クラスは教科としての英語)を基盤としたコーパスを構築し、(1)生徒の日本語と英語の使用割合、(2)教師と生徒のインタラクションを調査した。COLT Part Bによるインフォメーションギャップのコーディングによる分析結果と、コミュニケーションのやり取りと考えられる生徒のL2発話を誘発した教師の発話の分析を報告する。 | |
| | | ⑥ | 小学校英語研究開発校の実践の共有化ー新教材との関連、パフォーマンス評価、小中接続ー | 宮本 由美子 折橋 晃美 井口 奈穂美 | 長野県上田市教育委員会 長野県小諸市立東小学校 長野県上田市立菅平中学校 | 研究発表 | 本研究は、高学年児童に焦点を当て、B市の実践と新教材との関連性、パフォーマンス評価および中学校への連続性の点から記述と考察を行い、移行期に新教材を用いた指導を教師への支援を行うことを目的としている。B市の開発校実践報告書と授業記録(映像を含む)からカリキュラム、目標、指導、評価等の調査、比較、省察、研究を深め、A市での応用の可能性を探る。 | 宗 誠 |
| | | ⑦ | 経年調査から得られた「習熟度を測るためのテスト問題」への示唆ーテスト問題の内容や形式に関してー | 伊藤 摂子 佐藤 玲子 新海 かおる 三島 伊久美 | 東洋大学 明星大学 春日部市立武里小学校 本巣市教育委員会教育センター | 実践報告 | 小学校6年生および中学校1年生約1,000名を対象とした2013年から2017年までの外国語活動習熟度調査実施の中で、問題作成や修正の作業、児童の正答率、誤答などの経年調査から、児童の習熟度をより正確に測るには、テスト問題のあいまいさから生じる誤差をどのように小さくしていくことができるのかについての研究発表を行う。 | |
| 教養A棟 | A33 | ③ | 放課後子ども英語教室での試みーEric Carle の絵本に親しむー | 林 愛 | 津田塾大学大学院 | 実践報告 | 東京都内公立小学校での放課後教室において、低学年クラスと高学年クラスを対象に、2017年度2~3学期にかけて10回のレッスンを行った後、クラス合同で最終発表を行った。本研究では放課後教室という特性を活かし、1年生から6年生までEric Carle 絵本を共通の題材として、1冊の絵本に深く親しむ事、そして、1冊の絵本からより多くの学びに触れる事を目的として実践した。その初年度の試みについて報告する。 | 矢野 淳 |
| | | ④ | 小学校外国語科における英語絵本の読み聞かせー中・高学年の発達段階に適した内容選定のためにー | 東海林 明美 | 愛知県立大学大学院生、愛知淑徳大学(非常勤) | 研究発表 | 本研究は、小学校外国語科における英語絵本の読み聞かせ実践から、中・高学年の発達段階に適した内容を明らかにすることを目的とする。平成28年5月文部科学省は、小学校中学年用「Hi, Friends! Story Books」を開発した。外国語活動の必修化以降、英語絵本の教材としての地位は低く、読み聞かせとして取り扱われる頻度が少ない。愛知県内N小学校での英語絵本の読み聞かせから内容選定を検討する。 | |
| | | ⑤ | 低・中・高学年で扱いたいライム、ストーリー、ことば遊びなどー米国「The Core Knowledge Series」幼~小6の分析よりー | 衣笠 知子 | 園田学園女子大学 | 研究発表 | 「外国語(英語)コア・カリキュラム」に「児童文学(絵本、子ども向けの歌や詩等)」が挙がっている。子ども向けの歌や詩等に最適と考えられる英語圏伝承ナーサリーライムは英語圏では主に幼児や低学年で扱われ、日本の中・高学年の発達段階と興味・関心に合うかという疑問は否めない。米国の「The Core Knowledge Series」を参考に、発達段階に合うライムなどの選択の糸口を考察し、具体例を示す。 | |
| | | ⑥ | 言語的特徴を観点とした小学生向けストーリー教材の分類ー英文解析プログラムによる多角的分析に基づいてー | 名畑 真吾 木村 雪乃 | 共栄大学 獨協大学 | 研究発表 | 本研究は、小学生向けストーリー教材の類似性や相違性を言語的特徴の観点から明らかにすることを目的とした。英文解析プログラムによって教材に含まれる語彙や文の統語構造を分析した結果、文部科学省作成のストーリー教材は他の教材と比べて語数が少なく、統語的な複雑さが低いことや、Hi, friends!に含まれる物語文は語数、統語的複雑さ、結束性の点で他の教材と部分的に類似していることなどが示唆された。 | 中村 香恵子 |
| | | ⑦ | 小学校教員養成課程における「小学校英語教育法」のアクティブラーニングを考えるー教材の世界から一歩踏み出し、自分らしく楽しく創造するー | 西崎 有多子 | 愛知東邦大学 | 研究発表 | 児童が能動的に学ぶためには教師が能動的かつ創造的になることが求められる。新教材や英語絵本の世界を共有しつつ少し違った登場人物を表現したり、音韻については単語から音素の認識を日本人向けの方法で理解したり、科目横断的な学びについては小学校での学びを科目の枠を超えて、最新のIT技術を取り入れた小道具を使って統合的に学ぶ方法を開発、紹介する。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|------|------|--------|--|------------------|---|------|--|--------|
| 教養A棟 | A41 | ③ | 電子辞書を活用した小学校児童のための参加型文字指導 - 絵本教材を活用した児童とのやりとりを通して - | 佐藤 久美子 鈴木 さおり | 玉川大学大学院 町田市英語推進教員 | 研究発表 | 町田市では、教育委員会主催で放課後英語教室が始まった。放課後に自分の小学校に残り、英語の授業が受けられる。そこで、正課とは少し異なる手法で文字指導を試みている。電子辞書は音が出たり、画面に絵本の1コマが使われているので、児童の興味を引く。かつ、絵本の1コマを通して児童と講師がやり取りを行えるので、単語の記憶保持にも役立つと考える。電子辞書を使った場合と、絵カードを使った指導法とを比較して検証した。 | 小野 紳一郎 |
| | | ④ | 小学校外国語活動・外国語科実施に向けての現状から - 宝塚市における移行措置の取り組みと課題克服へ | 高木 浩志 | 宝塚市立逆瀬台小学校 | 研究発表 | 小学校外国語活動・外国語科において、新学習指導要領の実施に向けての移行措置が始まり、完全実施にむけての課題も見えてきている。その内容をしっかりと把握し、課題克服に向けての取り組みをしっかりと考え、学校現場でできることを段階的にでも実施できるようにしたい。宝塚市小学校教育研究会外国語部会と各学校現場の状況から、課題を見つけ出し、その内容についての検討を加え、可能な点から取り組んでいく。 | |
| | | ⑤ | | | | | | |
| | | ⑥ | 教員研修(OJT型)の実践 - 2年間(H28年度・H29年度)の取り組み - | 清水 万里子 | 岐阜女子大学、可児市英語教育アドバイザー | 実践報告 | 本研究は、岐阜県可児市内の全小学校において「次期学習指導要領(2020)の先行実施期間を見据え、小学校の担任が授業展開のポイントをつかむことで英語の授業に対する不安感を少しでも軽減して安心と自信をもって授業を行うことができるようにすること」を目的とした研究である。市はH27年度に取ったアンケート調査結果(教員対象)を踏まえてH28年度からOJT型に切り替えた。本発表では具体的な実践内容を発表する。 | 吉澤 寿一 |
| | | ⑦ | We Can! を使ったプロジェクト重視の英語学習の実践—移行期6年生の試み— | 白土 厚子 | 津田塾大学 | 実践報告 | 本研究は、6年生3クラスにWe Can! 2 やそのデジタル教材を活用しながら、Project-Based Approach の特徴を生かした枠組みの中で、移行期のため5年時未習の語彙や表現を音声で丁寧に扱いつつ「読む・書く」指導を加えた24回の授業実践を通して、We Can! を使った4技能統合を目指すプロジェクト重視の英語学習の参加児童への影響について考察する。 | |
| 教養A棟 | A42 | ③ | 「英語インタビュー」での課題と成果 | 秦 研介 | 四日市市立笹川東小学校 | 実践報告 | 英語インタビューの取組を通して、英語が伝わったという達成感や、学習した英語が活用できたという有用感、中学校以降の英語学習や英語コミュニケーションへの自信を育むことにつなげる。英語インタビューの取組は児童にとって有効といえる結論になったが、「何のために英語でインタビューするのか」という根本的な課題に教師がどう向き合っていくかが重要であると考える。 | 吉澤 寿一 |
| | | ④ | 伝えたい内容を重視した英語授業を目指して—目的意識・相手意識を持たせるために— | 乗富 智子 滝沢 雄一 | 金沢大学附属小学校 金沢大学 | 実践報告 | 本発表では、明確な目的意識をもち、内容や表現などを工夫しながら本当に伝えたいことを伝えられる授業を目指し6年生を対象に実施した「夏休み読得大作戦」「20年後のわたしへ」の2つの単元の授業実践について報告する。(1)子どもの実態や興味関心を考慮したトピックの選択、(2)単元のゴール達成に向け児童との共同での単元構成(3)具体的な相手や場面の設定(4)モデルの間かせ方などの工夫等の手だてを講じた。 | |
| | | ⑤ | 暗記型から即興型へ～即興性を生かした「話す(やりとり・発表)」「Let's Try」「We can」「Hi, friends!」の実践例 | 池亀 葉子 | 特定非営利活動法人 Creative Debate for Grassroots, 守口市立小学校 | 実践報告 | 覚えた英語表現を間違わないように言う「話す(やりとり・発表)」活動は、単なる「記憶ゲーム」であり、深い学びを伴う活動とは言い難い。本発表では、児童が「意味」について深く考えたり自分らしく話したりする為の仕掛けとしての、インプロを応用した「即興型学習ゲーム」の実践報告と実際のゲーム紹介を行う。児童が「失敗は楽しい」と感じながら、自らの身体や心を動かし、創造的かつ協働的に学ぶ様子も報告したい。 | |
| | | ⑥ | 低学年児童が夢中になる外国語活動 —どのような活動が子どもたちのやる気を引き出すのか— | 元浦 亮太 | 宇都宮市立峰小学校 | 実践報告 | 発表者は現在、昨年度からの持ち上りの2年生を担任している。昨年度の授業実践では、児童が楽しく活動に参加する場面とそうでない場面が見られた。そこで、低学年の児童が興味・関心をもつ活動は何かを、録画授業における児童の姿から考察し、それらを授業に取り入れることで、発表者自身の授業改善を行った。 | 福原 史子 |
| | | ⑦ | 児童の積極的アウトプットを高める研究—タスクサイクルを取り入れた「発表」を通して— | 河村 昌宏 | 小郡市立三国小学校 | 研究発表 | 本研究では、小学校外国語活動の授業の中に Willis (1996) が定義する「タスクサイクル」を取り入れた学習活動を実験群、統制群でそれぞれ2単元行うことで、①児童たちは「発表」をより積極的に行うようになるのか ②児童たちの目標語彙や表現の意味理解はより高まるのか ③児童たちの積極性と意味理解には関連があるのか、の3点について検証する。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|-------|------|--------|---|-------------------------------------|--|------|---|--------|
| 教養A棟 | A43 | ③ | 小学校英語新教材とHi, friends!におけるコミュニケーション活動のタスク性比較 | 志村 昭暢 | 北海道教育大学 | 研究発表 | 本研究では、小学校英語教材におけるコミュニケーション活動についての特徴と違いを明らかにするために、これまでの小学校外国語活動で使用されてきた、Hi, friends!1,2と新学習指導要領に対応し、現在の移行措置及び先行実施で、外国語活動及び外国語科で使用されている小学校英語新教材、Let's Try! 1.2・We Can! 1.2について、臼田他(2009)で行った教科書のタスク性分析を用いた。 | 大谷 五十二 |
| | | ④ | 高学年児童の学習ストラテジーと分析的学習能力ー明示的な音声指導に対する振り返り記述の質的分析ー | 河合 裕美 | 神田外語大学 | 研究発表 | 本研究は、公立小学校5学年児童の英語音声(音素)の知覚・産出能力の実態調査の結果に基づいて、翌年の6学年において明示的な音声指導を実施し、それに対する児童の反応を質的に検証した。高学年児童は高い思考能力やメタ認知能力によって、明示的指導に対して学習ストラテジーを構築し、分析的に学習していることが明らかとなった。 | |
| | | ⑤ | 教職履修学生の教授言語に対する好みと期待ーSLAの知見を取り入れた指導によってもたらされる変化ー | 岩中 貴裕 | 山口学芸大学 | 研究発表 | 本研究は小学校教諭を目指す教職履修学生を調査参加者として、SLAの知見を取り入れた英語指導が彼等の教授言語に対する好みと期待にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。収集したデータを分析した結果、SLAの知見を取り入れた英語の授業を受けることによって、英語力が低い学習者であっても、英語で行う英語の授業に対して肯定的な反応を示すようになることが示唆された。 | 湯川 笑子 |
| | | ⑥ | 新教材を用いたインタラクティブな授業の実践ーWe Can!2のUnit1からUnit3の授業実践を通してー | 八木澤 学 | 宇都宮市立田原小学校 | 実践報告 | 新学習指導要領の完全実施を2年後に控え、移行措置期間となり、新教材による授業の先行実施が開始された。第6学年児童は、新教材We Can!2を通して、実に多くの英語表現に出会い、コミュニケーション活動を体験する。情報量の豊富な新教材をどのように活用すれば授業をインタラクティブにできるか、実践を通して検討していく。 | |
| | | ⑦ | A Comparative Analysis of Elementary School English Textbooks between Japan and Taiwan -From the perspective of vocabulary acquisition- | Wang Wei-Tung | 明治大学大学院生 | 研究発表 | 日本では、小学校英語の教科化に伴い、小学校英語の教材開発も進みつつある。語彙は、外国語学習において一つの重要な役割を果たしている。本研究は、国際比較を通じ、日本の新教材の「Let's Try!」と「We Can!」および台湾の小学校英語検定教科書をコーパス化して語彙の分析を行った。語彙学習の観点から、日本の小学校英語検定教科書の開発に向けた提言を行う。 | |
| 教育学部棟 | 21 | ③ | 小学校英語新教材における文字指導とCan-Do評価 | 泉 恵美子 アレシ 玉井 光江 田録 真弓 | 京都教育大学 青山学院大学 ノートルダム学院小学校 | 研究発表 | 本発表は、小学校外国語科におけるリタラシー指導を新教材We Can!を使いながらCan-Doでどのように評価できるのかを検証することである。具体的には公立小学校での週2時間体制、並びに私立小学校での短時間学習体制におけるリタラシー指導に対しCan-Do評価を実施し、その評価方法の妥当性を検証した結果を報告する。さらに私立小学校の研究ではWe Can!のワークシートを使った実践例を報告する。 | 鈴木 はる代 |
| | | ④ | 小学校英語新教材における活動設計とCan-Do評価 | 長沼 君主 泉 恵美子 山川 拓 森本 レイト 敦子 | 東海大学 京都教育大学 京都市立九条塔南小学校 帝塚山学園帝塚山小学校 | 研究発表 | 次期学習指導要領における小学校での英語教科化への移行期間にあたり、新教材We Can! 及びLet's Try! が文部科学省より公開された。本研究では、教科化に伴う学習到達目標としての「CAN-DOリスト」の設定にあたり、年間指導計画や単元計画への活用に留まらない、観点別学習状況評価への活用や児童との共有のための、自己効力と自律性を促進するCan-Do尺度及び言語活動の試案の開発を行った。 | |
| | | ⑤ | 外国語活動・教科としての英語の評価に対する意識 ~ 評価項目における重要度の変化に焦点を当てて~ | 深澤 真 神村 好志乃 山中 隆行 | 琉球大学 琉球大学教育学部附属小学校 琉球大学教育学部附属小学校 | 研究発表 | 本研究では評価項目の重要度の観点から、外国語活動と教科としての英語に対する意識に変化があるのかを明らかにすることを目的としている。公立高校12校の教員を対象にアンケート調査を行った。その結果、読む能力、話す能力(発表)、書く能力、文法の知識、文字や語彙の知識の5項目で意識の変化が見られ、教科としての英語では、特に読む能力、書く能力の評価上の重要度が高まる傾向にあった。 | 川上 典子 |
| | | ⑥ | 小学校英語教育における評価に関するメタ分析: 先行実践の回顧を通じた実行可能な評価のあり方を求めて | 兼重 昇 小笠原 剛士 | 広島大学 旺文社 | 研究発表 | 本研究は、現行の外国語活動や新課程に向けて取り組んできた評価に関する取り組みをメタ的に振り返り、課題および課題解決のための取り組みをまとめることで、小学校英語教育における評価の進め方を提案することを目的とする。結論として、教員研修において、実際の評価方法に関する研修を推進すること、AIの音声認識機能や評価可能なコミュニケーション場面の構築など、評価者の負担軽減の可能性について論ずる。 | |
| | | ⑦ | 山形県における、小学校英語教科化に関する調査研究 - その問題と対策について | 金子 淳 山口 常夫 | 山形大学 東北文科大学 | 研究発表 | 移行期間も踏まえ、2020年から小学校の英語が「教科」になる。それにより、「評価」が求められることになる。評価方法の詳細については、現時点で文部科学省は明らかにしていないが、少なくとも学習到達目標(CAN-DOリスト等)に拠ることは明らかになっている。この点を含め、山形県内の小学校における英語教科化に向けての現状を調査し、問題点を明らかにして、その対策を提示することとした。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|-------|------|--------|--|-----------------|----------------------|------|---|-------|
| 教育学部棟 | 22 | ③ | 小学校から中学校にかけての縦断調査：言語運用能力と情意面に焦点を置いて | 西田 理恵子 | 大阪大学 | 研究発表 | 本研究では小学校5年生から中学校3年生にかけての5年間における生徒の言語運用能力、内発的動機づけ、自律性、有能性、関係性、コミュニケーションへの積極性、理想自己、Can-Doに関する変化の傾向を探り、5年間の変化の様子を、全体傾向と個人の傾向から明らかにすることを目的としている。7月と2月とを比較すると言語運用能力が上昇する傾向にあることや、情意的側面についても上昇する傾向にあることを明らかにした。 | 鈴木 渉 |
| | | ④ | テーマ学習と外国語活動の授業－児童と学級担任の自己肯定感を高める－ | 杉本 孝美 | 東大阪大学 | 実践報告 | テーマ学習を取り入れた外国語活動の授業の実践報告である。実践を行う前の児童の実態を分析し、学級担任とともに児童の自己肯定感を高めるための授業の組み立てを考えていく中で、小学生の学びのプロセスを理解している学級担任がそのことを再確認し、自信がなかった外国語活動の授業に自信が持てるようになっていった実践について報告する。 | |
| | | ⑤ | 児童の好意度英語授業と低好意度英語授業の比較－振り返り分析を通して－ | 猪井 新一 | 茨城大学 | 研究発表 | 児童の好意度の高い英語授業と低い英語授業は一体どのような特徴をもつのであろうか。それを調査する一つの手段として、児童の授業の「振り返り」を分析する。児童の好意度授業の振り返りと、低好意度の授業の振り返りを比較し、その共通点および違いを探ろうとするものである。分析対象は、英語授業で「楽しかったこと」「楽しくなかったこと」に関する自由記述部分である。 | |
| | | ⑥ | 児童の知的好奇心を刺激する英語活動を目指して－第3学年児童の発達段階から見る豊かな授業とは－ | 酒井 成彦 | 栃木市立赤麻小学校 | 実践報告 | 発表者は、昨年度は2年生の担任として、低学年の発達段階に合わせて、①英語にたくさん触れる②児童自身が考える③実物を使って大きさや形を体感させる。の3観点を意識して授業に取り組んできた。今年度、同じ児童を3年生で指導することとなった。活動的で知的好奇心の旺盛な3年生にとって、より豊かな英語の学びを増やしていくために有効な工夫や手立てを明らかにしていく。 | 西原 真弓 |
| | | ⑦ | 大学・地域資源を活用した実用的外国語活用能力とその習得意欲向上へのアプローチ | 玉城 本生 | 名桜大学 | 研究発表 | 外国語初級学習者に対して、大学及び地域資源を活用した実践的かつ体験的な学びを通して外国語を運用或いは学習することにより、その習得を促進し学習意欲向上へとつながることを明らかにすることを目的とする。大学の資源である学生が中学校での外国語学習補助を行い実践的な学習の場を提供することで、学習者が体験的に学びその既習事項の定着が促進された。地域の小学校でも同様な活動を行い、外国語学習意欲の向上を図る。 | |
| 教育学部棟 | 32 | ③ | オーストラリアの学校との姉妹校交流実践報告 | 井上 みちこ | メルボルン在住フリーランス(元大学助教) | 実践報告 | 過去8年近く、横浜市立学校はオーストラリアにある日本語を学習している公立学校と姉妹校関係を結んで交流を実践している。現在小学校が12校、中学校が1校である。姉妹校関係の実践と交流を通して得られる貴重な経験、そして実践する上での課題点を提示する。さらに、小学校英語教育のために将来的にどうあるべきか提案する。発表者は交流校を統括する、在メルボルンコーディネーターを務めている。 | 山崎 祐一 |
| | | ④ | 英語学習における支援の試み～海外の外国語教育における支援例をもとに | 大谷 みどり | 島根大学 | 研究発表 | 子どもたちが英語を学ぶ中で、日本語との違いや外国の人とのやりとりを楽しむことが出来る一方で、様々なつまずきを経験する子どもたちも存在する。言語の違いだけでなく、子供によっては特徴的な認知特性や、発達障害の可能性の有無等がつかずきに影響を及ぼす場合も少なくない。英語学習における困難性への支援例を紹介しながら、海外の外国語教育における支援の在り方から、日本の教室で活用できることを考える。 | |
| | | ⑤ | 新教材における4技能の分析－韓国の小学校英語教科書と比較して－ | 早瀬 沙織 | 東京大学大学院生 | 研究発表 | 本発表では、日本では2018年に新学習指導要領対応の小学校外国語教材として文部科学省が作成した新教材は、どのような特徴があり、4技能のバランスはどうかを明らかにする。さらに、2018年度から新課程の教科書へと変化している韓国における小学校の英語教科書の特徴を分析することで、日本と韓国の教科書の類似点と相違点も明らかにする。 | |
| | | ⑥ | 子どもたちの視野を世界へ広げる小学校英語の授業提案～「We Can!」を活用して、「地球市民」を育てる～ | 阿部 始子 | 東京学芸大学 | 実践報告 | 本発表は新教材We Can!を活用し、何のために外国語を学ぶのか(学びに向かう力・人間性等)を意識し、多様な人・モノ・コトが行き来する世界の状況を考え(思考力)、外国語を使っていつ誰に何を(判断力)、どのように伝えたいのか(表現力)を総合的に扱う授業実践の試みを参加者と共有する実践報告である。教師がどのように小学校外国語(英語)教育と向き合うかの議論の端緒となればと願う。 | |
| | | ⑦ | 小学校英語の教科化を見据えた新たな指導プログラムの開発－効果的なモジュール活動の展開を目指して－ | 阿部 勲寿 佐久間 康之 | 紫波町立赤石小学校 福島大学 | 実践報告 | 本研究は、平成26年度より4年間にわたり岩手県紫波町で文部科学省より指定を受けた「外国語教育強化地域拠点事業」の小学校高学年「外国語」のカリキュラム開発における短時間学習(モジュール)の研究である。認知心理学の記憶の視点から「授業」(45分間)と運動した「モジュール活動」(15分間)を効果的に実施することにより、学習意欲の向上と学習内容の定着を目指した実践である。 | |
| | | | | | | | | 秦 潤一郎 |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 |
|-------|------|---|---|--|------|--|-------|
| 教育学部棟 | 33 | ③ 小学校外国語科・外国語活動で扱われるカタカナ語 ー日本語と英語の意味のギャップに着目してー | 星野 由子 清水 暹 | 秀明大学 東北学院大学 | 研究発表 | 本研究は、“We Can!”と“Let’s Try!”に含まれる語彙の特徴を調べ、特にこれらの教材にカタカナ語がどの程度含まれているのか、そしてそのカタカナ語の意味と児童が英語として触れる意味との間にギャップがあるのかどうかを検証した。ギャップがある語は数としては多くはなかったが、これらの単語が出て来た際には具体例を多く示すなどで意味のギャップに気づかせる工夫が必要となるであろう。 | 福原 史子 |
| | | ④ 劇活動を上手く授業に取り入れる 6年生に劇はハードルが高い?! | 若松 里佳 竹田 里香 | 荒川区立ひぐらし小学校 姫路獨協大学他(非常勤) | 実践報告 | 演劇は特定な人がするもの、と思われがちであり、とりわけ、小学校生活においては、学芸会など、年に1回程度行われる比較的特別な行事となっている。外国語活動においても、特に高学年では、劇活動が敬遠されることが少なくない。しかし、導入の方法やインプロの手法を取り入れる事で、児童がより体験的に言語を学ぶ機会を持ち、産学だけでは学べない表現活動を楽しむことができた。その実践を報告する。 | |
| | | ⑤ 小中連携におけるリテラシー活動の効果ーTEAを用いた英語教師へのインタビュー分析ー | 本田 勝久 太田 洋 山本 長紀 | 千葉大学 東京家政大学 神戸市立工業高等専門学校 | 研究発表 | 東京都A区の小学校では、音と文字のつながりを学ぶためのリテラシー活動を導入した授業が実践されている。しかし、小学校英語で音に慣れた学習者が、中学校でつまずくことの一つが音と文字のつながりである。本研究では、小中連携を踏まえたリテラシー活動を実施している中学校教員に対するインタビューから、リテラシー活動を通しての教師の意識の変容を探り、活動の効果を報告する。 | |
| | | ⑥ 小学生のための語彙サイズテスト開発:ラッシュモデルによる試行テストの項目分析から | 佐藤 剛 | 弘前大学 | 研究発表 | 本研究は、小学校英語教育における評価及び測定方法としての小学生のための語彙サイズテストの開発を目的とする。外国語活動の教材から語彙サイズテストを開発し、83名の児童を対象に試行テストを実施した。その結果、小学生の語彙サイズの平均は、500語程度であること、試行テストは被験者の能力値と比較して簡単すぎる項目が多いことが明らかになった。項目の入れ替えを行い、テストの信頼性と妥当性を高めていきたい。 | 本田 勝久 |
| | | ⑦ Let’s Try!及びWe Can!と中学校教科書で扱われる語彙の比較分析 | 中村 洋 | 二セコ町立二セコ中学校 | 研究発表 | 平成29年度にLet’s Try!及びWe Can!が公表された。Hi, friends!ではゲーム的要素の強い活動が多かったが、Let’s Try!, We Can!では、現行の学習指導要領の中学校2年生相当の言語材料や語彙も多く扱われている。これらを踏まえ、本研究ではLet’s Try!, We Can!で扱われる語彙・語句を整理し、現行の中学校英語教科書で扱われる語彙とも比較・検討する。 | |
| 教育学部棟 | 42 | ③ 小学校英語と国語科文法の連携の可能性と問題点 ー英語のルールの発見活動から得られた示唆ー | 西垣 知佳子 安部 朋世 物井 尚子 神谷 昇 小山 義徳 | 千葉大学 千葉大学 千葉大学 千葉大学 千葉大学 | 研究発表 | 本研究は、小学校における英語教育と国語教育の連携の可能性と問題点を探ることを目的とする。発表者らは、英語の語彙、表現、文構造、言語の働きなどに対する明示的な気づきを引き出すためにデータ駆動型学習を授業に導入してきた。その実践から得られた学習者の「気づき」の内容を分析したところ、国語科文法で身につけた知識が有効に機能している場合とその知識を英文法の学習に直接には利用できない場合があることがわかった。 | 宗 誠 |
| | | ④ 小学校4年から6年までの児童の意識変容 | 和田 順一 木下 愛里 酒井 英樹 | 松本大学 信州大学大学院生 信州大学 | 研究発表 | 本研究は小学校4年生から6年生までの児童の意識変容を調査したものである。外国語活動の実施状況が異なる3つの小学校でアンケートを実施し、その児童らの意識が4年次、5年次、6年次でどのように変容していくのかを学校毎に学年を追って見ていく。本研究が焦点をあてる項目は、アンケートの中の英語への慣れ親しみなどに関する16項目である。 | |
| | | ⑤ 小学校卒業時の児童の文法知識ー文法性判断課題、メタ言語知識課題の結果からー | 内野 駿介 | 北海道教育大学 | 研究発表 | 小学6年生175名に対し時間制限付文法性判断課題(TGJT)及びメタ言語知識課題(MKT)を中心とした調査を実施した。各課題の正答数の平均値は概ね半数程度であり、両課題の正答数間の相関係数は $r = .144$ ($p = .064$)であり、正答率には文法項目間では有意差が認められた。以上より、TGJTとMKTでは異なる知識が測定されていること、及び児童の文法知識の実態の一端が明らかになった。 | |
| | | ⑥ 小学校高学年児童の英語能力と英語学習に対する意識の変容 ー児童の自己評価に影響している要因は何かー | 田中 真紀子 河合 裕美 | 神田外語大学 神田外語大学 | 研究発表 | 本研究は、小学校で教科として英語授業を受けた高学年児童の英語能力(語彙テスト、音一文字一致テスト)や英語授業に対する意識(英語能力の向上心、英語授業への関心、英語能力の自己評価)の経年変化とそれらの関係性を明らかにした。高学年児童の英語授業への関心・英語能力・向上心が自己評価に影響を与えており、6年生は英語に対する向上心(読み書き能力、発音など)が高まっていることが分かった。 | 矢野 淳 |
| | | ⑦ ストーリーを中心とした授業で獲得した英語の力についてー英語学習に影響を与える要因 | アレン 玉井 光江 井出 麻美子 塚原 麻衣 | 青山学院大学 小学館集英社プロダクション研究部門 小学館集英社プロダクション研究部門 | 研究発表 | 本発表では、「文脈を大切にしたい」物語中心のカリキュラムで英語を学習した児童(N=3816)の英語能力について報告する。到達度テストを実施し、その結果を項目分析し、履修年数、年齢、性別の影響も分析した。その結果、テストは信頼度のあるものであり、性別、年齢、履修年により児童の英語習得に差があることがわかった。項目分析の結果から児童が学習内容をどのように定着させているのかを考察する。 | |

| 教室 | 発表時間 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 | 司会者 | |
|-------|------|--------|--|-------------------------|-----------------------------|------|---|-------|
| 教育学部棟 | 43 | ③ | 小学校教員の英語指導に対する不安の変動－学校内研修を通して－ | 池田 真生子 竹内 理 今井 裕之 | 関西大学 関西大学 関西大学 | 研究発表 | 本研究では、新しい学校内研修システムの導入が、英語指導に対する不安軽減にどのように寄与するのかを調査した。公立小学校2校での42名へのアンケートと、うち6名へのタイムライン図作成およびインタビューの結果から、個人の不安軽減に本研修システムが寄与していることが確認された。また不安を引き起こす要因として、校内での役割、研究授業担当の有無など、様々な状況要因が複合的に関与していることも明らかになった。 | 佐藤 博晴 |
| | | ④ | 教員研修と授業実践前後の小学校教員の意識と態度の変容 | 高杉 梨乃 | さいたま市立文蔵小学校 | 研究発表 | 本研究は、外国語活動に携わる小学校教員の外国語活動に対する意識や態度の変容を明らかにするため、教員研修・授業実践参加後の公立小学校担任教員にインタビュー調査を行った。担任教員の外国語授業に対する不安要素、今後の教員研修に望むものが明らかになった。本発表は、その分析結果の詳細について報告するものである。 | |
| | | ⑤ | | | | | | |
| | | ⑥ | 何が彼らを変えたのか —ベテラン教員の意識変容を目指して— | 塩井 博子 | 宇都宮市立峰小学校 | 実践報告 | 小学校には様々な年齢層の教員があり、外国語活動への取り組み方は個人差が大きい。特に、ベテラン教員は、実践に対して消極的なのが現状である。そこで、ベテラン教員の意識を変え、授業に主体的に関わるようにするためにはどんな校内研修が有効なのかを、ベテラン教員の授業における発話分析や、全教員を対象にした研修内容と意識変容についてのアンケート調査から明らかにしていく。 | 猫田 和明 |
| | | ⑦ | 「初等英語科指導法」を通じた学生の姿容—コア・カリキュラム及び英語力の自己評価の点から— | 酒井 英樹 内野 駿介 木下 愛里 | 信州大学 北海道教育大学 信州大学大学院生 | 研究発表 | 本研究は、『初等英語科指導法基礎A』の初回及び最終回に質問紙調査を行い、コア・カリキュラム(東京学芸大学、2017)の内容理解と英語力の点から、どのような知識等を身につけたのかを調べたものである。コア・カリキュラムに関する項目では39項目中38項目で有意な伸びが認められた。英語力に関する項目では36項目中10項目で有意な伸びが認められたが、効果量は小及びほぼ無であった。 | |

| | 教室 | 発表タイトル | 発表者 | 所属 | 発表種類 | 要旨 |
|------|-----|---|---------------------------------|------------------------------------|------|--|
| 教養A棟 | A14 | 小学校におけるパフォーマンス・アセスメントの可能性 | 廣江 顕 | 長崎大学 | 研究発表 | 本発表では、文部科学省の「今後の英語教育の改善・充実方策」(2014)において示唆されているパフォーマンス・アセスメント(performance assessment)を、小学校でも実施することを想定し、どのような評価方法、実施方法、結果の評価・分析が行えるかその可能性を探ると同時に、どのような問題点が予想されるかについても併せて考察した。 |
| | | 小学校教員免許履修学生の英語力、学習動機付の検証 | アスコー朋子 | 淑徳大学 | 研究発表 | 小学校免許課程履修学生1,259名のコミュニケーション能力、海外経験を変数に英語学習への興味、英語教育の重要性、小学校教員の英語力向上の重要性、また英語学習動機意欲を高める為どのような動機付けストラテジーが重要と考えているのか、記述統計、Spearman相関関係、カイニ乗検定を行い、観測された変数の影響を調べる為に因子分析を行った。コミュニケーション能力レベル高低においては正の相関が見いだされた。 |
| | | 小学校教師の英語授業に関する指導観の特徴：教育環境要因の違いにおける比較 | 中村 香恵子 志村 昭暢 坂部 俊行 | 北海道科学大学 北海道教育大学 北海道科学大学 | 研究発表 | 本研究の目的は、環境要因の違いによる教師の指導観の特徴を知ることであり、英語教育経験と教師へのサポート体制の違いがある2校の教師に対してグループ討議を実施し、教師が無意識にもっている指導観を引き出すことを目指した。また必修化による指導観の変化を知るため、先行研究で得られた結果との比較も行った。分析の結果、グループ毎にいくつかの特徴的な傾向が見いだされ、それらを環境要因とのかかわりにおいて考察した。 |
| | | 小学校英語における複言語教育—教員養成における「言語への目覚め活動」からの示唆— | 大山 万容 | 立命館大学 | 研究発表 | 外国にルーツを持つ子どもの言語的・文化的統合のため、小学校英語における方策を考える。複言語教育の一つである「言語への目覚め活動」による教員養成から、1)マニュアルにのっとり必ず言語の関連性への気付きが生まれるような教材、および2)教師が児童のように学習者としての視点が必要であり、すると3)英語のみを扱う場合には得られないような、国語科や社会科、道徳科と関連する気付きが生まれることが認められた。 |
| | | 高学年児童の英語運用能力と自己評価の関係に関する一考察—2年間の質問紙調査と英検Jrを用いて— | 物井 尚子 | 千葉大学 | 研究発表 | 本研究は、自己評価に着目し、その有用性について調べる。学習者の自己評価と英語運用能力の関係を探るために、L2コミュニケーションに関する認知を尋ねる質問紙と英検Jrを用い、5年生374名を2年間にわたって調査した。高学年児童は英語力を自己評価することが可能であるのか、その評価にはどのような特徴があるのか、さらに、学年が上がるにつれて自己評価はどうか変化するのか、を明らかにした。 |
| | | 小学校外国語活動5・6年生の文字指導実践報告—2017年度年間文字指導の試み— | 長谷川 和代 | 神戸女子大学、小学校外国語活動支援団体 Friendly World | 実践報告 | 本発表は、ある自治体の年間文字指導の実践報告である。ごく普通の公立小学校の担任が文字指導をどう行えばよいのか、果たして児童の書く意欲を損なうことなく達成感を持たせることができるのかなどを試みた。その結果、ルーティン化・教材の工夫等が担任の不安を軽減させ、児童への声掛けにもつながるようになった。また児童は書き写しに慣れ、お互いに協力し合って活動することが分かった。それと共に新たな課題も見えてきた。 |
| | | アルファベットの大文字を書く指導 | 星 笑美子 石川 淳太郎 | 宇都宮市立岡本西小学校 宇都宮市立岡本西小学校 | 実践報告 | アルファベットの大文字を書く指導にあたり、友達にメッセージカードを送る活動を通して、自分が伝えたいメッセージに用いられる文字を読んだり、なぞり書きしたりする活動を行った。音声に十分慣れ親しんだ語を話題に児童とやり取りして、相手意識をもって伝えたい文字を並べるように工夫し、授業実践を行った。文字を書いて伝える必然性が生まれ目的意識をもって活動することができた。 |
| | | 英語音を感じさせるためのアプリを使った英語発音学習活動 | 多良 静也 米崎 里 立松 大祐 大嶋 秀樹 | 高知大学 甲南女子大学 愛媛大学 滋賀大学 | 実践報告 | 英語音の違いを意識させることを目的に開発した英語発音デジタル教材(多良他, 2016)に音声認識機能を搭載し、短期的ではあるが、小学生に個別学習という形で活用してもらった。音の違いを聞いたり、理解して産出したりすることの繰り返しによって、英語音らしく発音しようと努力する姿が見られたり、音に対して今まで以上に敏感になっているといった効果が見られた。 |